

八雲三五十頁 全

特 別
A5
6590
15



美濃

遅樂茶監定



茶書
園

出雲

夢中葺撰
如意葺補



美濃

この種は百五十圓三の二の由あるより十一の二の
後遅出老休二の三を三とせまにたり哉都全
玉の又おいて未はを及るる邦の所を法と
はるる茶書にやさくきさく種たるは力にありたる
るありはるるしるる止まらぬにありぬにハ
てふ出雲の圃にけさて改るる心茶志を二の三志を
三とたにありて後書を以て信と杖室にやせし向書
くよ控のあぬ入式を候 孫海月を企る影を

三刀屋乃喜於龜字也け柿ありさるやどを
 十冬に調りて三又百五十の孫を基とく
 の正理あるにややの操孫を承て更に世上乃緒
 化を論もは倫をふ所の冥途を仰る心にか
 との世にをわたりしきやと各ち孫一子我の
 方像のそにおきなるは始末なきのそめに伸
 傳ふいち固辭まじよきぬりぬる三子乃
 拙者も劣かしく龜字傳めを産志有誠信
 天保十四卯年神有月十二日



愛人政又世孫を絶せぬ一は遠祖のつれづれの
 石田養心公の「養心集」の「〜」して後
 一書とあり「徳川幕府の終るは徳川氏
 曰く昔々々々〜」の語句もまた人皆
 知る事なり〜
 予も〜
 又百六十
 世の〜
 此の〜
 〆〜

今もそとに院の持しや枯尾系 喜朝

在しき女方明此 衆 一甫

研上る 獨ふ 獨ふ 功 積て 烟 爇

ら けく きせ 宿に 編み あり 蝶 哉

貴も 報 賤し きも 報 する 如 也 松 苑

深 難 けり 舟 帆 あり とも 帆 桃 園

鳥より 先く 入 され 之 日の 月 雲 後

懐 けり あり とも あり 鬼 灯 花 喰

此 昔 々の 縁 女 公 齒 の う ち 多 事 也 食 五

血 衆 生 利 多 其 後 海 を 浦 陀 尼 花 嶺

さ くら くと 樹 け け け け け け け け け け 松 弱

也 痛 う の ち ち ち ち ち ち ち ち ち 其 正

痺 甚 しく なる 事 多 般 の も ち ち 也 玉 壺

新 層 や ら 滝 層 魚 ち 省 水

身 一 小 非 常 一 と 解 ち ち ち ち 也 龜 齡

さ くら あり 女 房 舞 の 故 事 多 冠 李

砂塔より酒ふまけ月の白

其遊

紫く根赤葡萄をうく

女
琴木

囀る子とやい別後やうそあつて

梅夏

逢ふあう明ふとさうめゆ淡

去冬

かけ袖とまうも茶のたね焼

白羽

戀まよとくぬるまの孝ん

新蛙

和まきしあに縁付のほひさう

虫列

撲ふぬされハ暗う進むと也

亀川

何く根ふ名を吹送くやう送く

竹里

左目のうつ又あくれ雙ふ

彭仙

甘みは春の笑用の外明もあれ

遠峰

あう乃音も浦ふさ白来る風

寿松

御あしぬ解ふ月代さ川さう

候至

懐き深き佛御も公

員弁

さゆ草より志うくよふ昔かう

夜星

それくれ小湯をう履

如舟

雪の低ふら我をわづらひの邊よりあれ
 後をかくるはつとほと入
 弓張の歌の看面入ちうり
 鼻て草塔あらけ 松
 法下の雪をい納めち世守
 寄して書い〜〜〜〜
 あう〜小への雪〜〜〜と我流る
 朴小種糸と西次降る
 笑立
 雨暁
 一枝
 松東
 有月
 荒笑
 幽川
 思雲

温純もそのふ行つて〜〜の
 ちあ〜〜の止めふれ毒
 牙る秋中あ〜〜と背子
 法水あ〜〜後原にる葉
 持ち来るを滅らけ小拂ちとる
 古稀とる〜〜の判控の筆
 清〜〜の清ふ〜〜のめ減らつ
 ち〜〜のち〜〜のち〜〜
 古水
 赤雨
 業風
 芥山
 新柳
 松居
 江月
 赤病
 古水

道之尾くまはゆきをふくなく
松多
文亀

右又十員

ふま向大吹雪きき異新よ借入て
苗まうの換

道之尾くまはゆきをふくなく
松多
蝶哉
其遊
玉壺

律考るふまはく大をや音のくれ
其炭
業風
冠李
文龜
一甫
外里
仙
羽

中ムラ
給下種ノ戸
向羽

外に書信せむるは一茶の定 有派
 むもこれ時ふらうやふらる 逸家
 ちうらゝのきしめらるる 笑之
 むもあそむるやあはの様うけ 日登 急
 ちうらゝのきしめらるる 幽川
 むもあそむるやあはの様うけ 無
 ちうらゝのきしめらるる 無
 むもあそむるやあはの様うけ 木次 急
 ちうらゝのきしめらるる 急

界の日に水素をくくつて 印月
 此の川に水素をくくつて 一枝
 日菊から出た水素をくくつて 杏松
 戸はくくつて 日菊 其正
 ちうらゝのきしめらるる 笑之
 ちうらゝのきしめらるる 今中 急
 ちうらゝのきしめらるる 幽川
 ちうらゝのきしめらるる 女 急

氷は花やとくして清く水煙の火 係屋
 鏡に映て身伴うあまの紙をふ 如舟
 春月や花ぬと母のなき 有月
 嫁れまよと心こめて思ふ路中か 雨曉
 陰有るもややあはるるも山 井谷 花曉
 惜のちやせと舞れあうと燈と世次 古水
 枯屋も花の枝をさうと 三刀や晴茶全士翁 思雲
 墨後

春のそらにて新火の焚や初めくわ 松花
 風ふ能まなれも月も春はくもく 松弱
 息をた枯ゆふ朱れももたうふ 桃園
 鴨のけあつ門田や芥の一二寸 杏列
 沙風や月もあまのこ 梅夏
 空のまに澄空や風呂に洗ひ換 芥山
 人多を埋入てききき 只里
 山果のまや春のまらても日暮の枝 松木

のち〜とて菜々くゆや并結 女 弄花
 神ふ色色んとてゆやあそ月 女 琴
 人さすや井の底の底の底の底 女 松居
 心さすや戸ふと海自さす小六月 新茶 新梅
 心さす〜とて息づく心向作 新茶 潤
 心さす〜とて月さす〜とて心向作 新茶 弄花

其二

心さす八句ふあそり能道の心をさす
 心さす八句ふあそり能道の心をさす
 心さす八句ふあそり能道の心をさす

心さす八句ふあそり能道の心をさす 麻 額
 心さす八句ふあそり能道の心をさす 如 々
 心さす八句ふあそり能道の心をさす 素 雅
 心さす八句ふあそり能道の心をさす 如 瓊
 心さす八句ふあそり能道の心をさす 玉 映
 心さす八句ふあそり能道の心をさす 四 勿

大根引 露の房か〜けの舟

茶遊

雲ちかぶる月とくの時由外 云水

霞あ〜〜花果や雪程の香粒 花露

藤伸しく念ん結むきつ花外 柳糸

鏡に喜し氷もやせのきん念外 茶丸

得ちき巨魁とくふきつ花外 新里

谷川やる流ら〜〜く〜月 馬柳

香深は露の月 ^{上クノ} 王映

霧に結の碎や ^{レラク} 岳山

水に白き花 ^{下シノ} 新月

さ〜〜花 ^{下シノ} 一角

月の音 ^{下シノ} 梅之

花の香 ^{アヨ} 夏推

ち〜〜花 ^{アヨ} 四勿

露の露の露の 寒〜〜 不悔

結

川流る尾糸のあやきりぬ 露池
 あ香れ梅や鈴のさ牡丹 亭水
 紅香や遊り化粧の鬼瓦 奇山
 あ山より香き梅やさき梅 若風
 味留る梅のさねあやきりぬ 花友
 香傳る梅や梅の踏留る 井友
 風や香もさきりぬ梅の月 交月
 水もや香もさきりぬ梅の音 田中 自傳

梅人のぬりたりの梅や香れぬ 春加 春海
 さき梅と梅のさきりぬ梅の音 八木 永楽
 梅の香もさきりぬ梅の音 三木 里
 梅のさきりぬ梅の音 三ツエ 梅里
 梅のさきりぬ梅の音 カモノ不始 雄
 梅のさきりぬ梅の音 梅原 梅原
 梅のさきりぬ梅の音 若原 若原
 梅のさきりぬ梅の音 若原 若原
 梅のさきりぬ梅の音 若原 若原

中野くらしめあさるるあつさる月 冬粧
世々ちるるさるあれて紙衣分 編函養集 集歌

たふす一頁

其 二

さし〜一節のりさるはのあをたれし
あつ〜おほき名の雅れ枝めてさるは
紙衣分のあは縁と馬場のさるし
さるさるのさるし〜さるさるし
はさるさるのさるし〜さるさるし

いりま〜けはふけは〜さるさる
さるさるのさるさる

さるさるのさるさる 訂押

さるさるのさるさる 京有

さるさるのさるさる 芦洲

さるさるのさるさる 冬明

さるさるのさるさる 権保

さるさるのさるさる 一枝

さるさるのさるさる 葎水

註

藤合丸	あさき	島文	延命	芦	誰
あつ	あつ	あつ	あつ	思	得
あつ	あつ	あつ	あつ	松	人
あつ	あつ	あつ	あつ	桂	里
あつ	あつ	あつ	あつ	文	郁
あつ	あつ	あつ	あつ	松	里
あつ	あつ	あつ	あつ	あ	月
あつ	あつ	あつ	あつ	あ	寛

漆	あ	あ	あ	あ	あ
あ	あ	あ	あ	あ	あ
あ	あ	あ	あ	あ	あ
あ	あ	あ	あ	あ	あ
あ	あ	あ	あ	あ	あ
あ	あ	あ	あ	あ	あ
あ	あ	あ	あ	あ	あ
あ	あ	あ	あ	あ	あ
あ	あ	あ	あ	あ	あ
あ	あ	あ	あ	あ	あ

境をよ 踏くま

喉耳

少きもの中なるものありしこと

柵系

わくわくありぬと云ふ物も

可流

浮世の女をなげきし物も

可流

志のたもつれさめぬ水

里新

月毛を著く

我

女帝のまゝに立佐中

席側

鼻をぬぐふは 嘆くま

得之

夕暮もたれ 沙汰に

可也

代々もたれ 徳を

花

もたれ 中を

花

右に十

各録

くらあつと 比田町之茶

茶

千河田や 桂保

桂保

本意やさしくして空の月の曇
 深ゆるるる草に水たまりの
 稀にさきしきさうりさきし
 ささささや竹まゆあさあさ
 浪のゆるらふは小舟れ日あつ
 日片掃のさうりささささ
 血流しきささささささ入
 年寄やさささささささ
 孤雲
 子推
 桂里
 紫青
 子言
 席御
 士経
 木仏

波小飛きんかさささ千鳥印
 持のささや鼻はさ合次嫁姑
 ぬまぬまさささささささ
 ささの白とささささささ
 浮もぬさささささささ
 ちささささささささささ
 曙さささささささささ月
 ささささささささささ
 思得
 多月
 喉耳
 楓多
 赤雲
 花楓
 大呂
 如楽
 不承

ちんちんはくや ちんちんはくや ちんちんはくや
 山菜のふり 山菜のふり 山菜のふり
 喉のつらさ 喉のつらさ 喉のつらさ
 ちんちんはくや ちんちんはくや ちんちんはくや
 巨魁のつらさ 巨魁のつらさ 巨魁のつらさ
 植のつらさ 植のつらさ 植のつらさ
 引のつらさ 引のつらさ 引のつらさ

竹サキ 柳雪
ヒラキチ 芦雁
クマヤ 芦洲
ハ川 柳保
マキ 夢松
アイ 赤明
アイ 寸鏡
 月手

ちんちんはくや ちんちんはくや ちんちんはくや
 山菜のふり 山菜のふり 山菜のふり
 喉のつらさ 喉のつらさ 喉のつらさ
 ちんちんはくや ちんちんはくや ちんちんはくや
 巨魁のつらさ 巨魁のつらさ 巨魁のつらさ
 植のつらさ 植のつらさ 植のつらさ
 引のつらさ 引のつらさ 引のつらさ

カハチ 得月
ミサキ 柳雪
ヤシロ 柳保
マハセ 夢松
 山候
 蘆水
ミトコロ 柳雪
 柳雪

積層のちりちり〜もけりる意外 夕方の 望

月雪の魏やちりれて水ぬる カクヤ如意 春有

張結の路はや山草れきききき カクヤ如意 嵐窓

空のちりきりあうりやきき酒 廻

引落のちりちりちりあ〜きき 一校

茶のちりちりちりもきき酒ちり 幽雅

けりちりちり〜ちり酒ちりちり 一葉

雪積ちりちりちりちり〜ちり 玉子

湖〜ちりちりちりちり〜ちり 疾く

星のちりちりちりちり〜ちり 亦在

ちりちりちりちり〜ちり 松人

一〜ちりちりちりちり〜ちり 文都

けりちりちり〜ちりちり〜ちり 得之

ちりちり〜ちりちり〜ちりちり 可雅

ちりちり〜ちりちり〜ちりちり 可流

雪〜ちりちり〜ちりちり〜ちり 淀砂

一那き月の出るや夜ふも 捕流舟 琴弓
口さうて枝をきや 付茶 花子
舟言や 夏中 舟の言 灯柙

終真

水辺の夜きぬらぬり お 松多
流 代 芦洲
獲 白 白羽

多 如 如く
流 亭 亭後
指 素 素雅
異 潤 潤美
宣 席 席州
相 如 如渡
舟 琴 琴弓
舟 一 一舟

夜ふ待りて夕暮れ射る

得月

筆如く流曲空舟出の吹如城

花多

心ゆくもくは味宿の百重の

千夜

る七五節もさる世にうら

席渡

おそめはさる世をくもは人

さよ

右不負首尾

云

片山をくまはくちてみる月

縁ゆき

云

舟に待りてはるる月

舟中

月

舟もくまはくちてみる月

舟中

舟もくまはくちてみる月

舟もくまはくちてみる月

舟もくまはくちてみる月

言

文をくくる夕ア念其の

落茶

茶の費を〜〜〜

もよ〜〜〜

〜〜〜



芭蕉翁百五十回忌

讚揚高德偈

創始滑稽平話吟哦

花諷月悉規箴此翁

周旋生涯觀在古池

蛙跣水音

右

如意茶

南高

拜



わが師ふり家の地〜〜〜

〜〜〜

左

綱意坊

塚是也豈不翁之德澤猶水在地中乎哉今茲
當一百五十周忌聊為報謝翁之恩德詠國風
俳歌將為一冊子時有固有雅衲既序其首吾亦
何言乎今視自國都大人至閭巷賤夫間知有
俳歌而樂詠雪月花者翁之德澤彌高而不落
彌久而不竭所致乎哉龜嵩高士書以請予跋
焉不得固辭恭裁蕪辭以污諸風子之後云爾

天保癸卯十月十二日

三刀屋

橫山藍齋謹識

蕉門書林

皇都寺町通二條

橘屋治兵衛梓

